

「英国ベヴァリッジ報告翻訳出版」

主任研究員（監訳）	関西大学政策創造学部	教授	一圓 光彌
研究員（翻訳）	東北文化学園大学医療福祉学部	教授	森田慎二郎
	高千穂大学 人間科学部	助教	百瀬 優
	神奈川県立保健福祉大学		岩永 理恵
	関西大学非常勤		田畑 雄紀
	神戸女学院大学非常勤		吉田しおり

1. ベヴァリッジ報告とは

1942年に出版された『ベヴァリッジ報告（原題は「社会保険および関連サービス」）』は、社会保険を中心に社会保障制度を構築し、さらに5大巨悪（欠乏、疾病、無知、不潔、無為）を解決する社会政策を国が実施すべきことを勧告しました。「揺りかごから墓場まで」ということばで報道され、英国国民は長蛇の列をなして買い求め、ナチスドイツへの勝利に向け勇気を奮い起こしたのです。

さらにこの報告書は、海外諸国にも大きな影響を与え、ケインズ政策とあいまって戦後の福祉国家建設に貢献しました。日本もその例外ではなく、戦後間もない頃から1960年代にかけての社会保障制度に関する提言や制度化の背後には、ベヴァリッジ報告の影響が見られます。1969年に一度、翻訳出版されましたが、今は絶版であり（出版社が倒産）、古本屋でも入手困難であります。

2. 研究テーマと問題意識

このプロジェクトの研究テーマは、このベヴァリッジ報告を翻訳・出版することです。社労士総研としては、初の翻訳・出版事業であります。その目的について、まずはこの絶版になった貴重な報告書を再び世に送り出すことによって、日本の社会保障研究に役立てていただくという「社会貢献」の役割、そして社会保障分野における唯一の国家資格者である社会保険労務士がその制度の在り方を勉強する良きテキストとして活用するという有意性、これらを総合的に判断し、この研究を発足させた次第です。読者としては、専門研究者というよりは、社会保険労務士の方々を含む一般国民を想定しています。したがって、全体の約1/3を占める専門的な付録（appendix）の訳出は割愛し概要紹介程度にとどめますが、イギリス社会保障などの予備知識のない読者を想定して、丁寧な訳注を本文につけるとともに、全体についての解説を巻末に置く予定です。

福祉国家化を否定するアメリカ発の新自由主義路線が、近年の日本において格差と貧困を拡大させたという反省が広がっている。日本で翻訳が出回る経済学者フリードマンは、社会保険を否定し、最低賃金制にも反対しています。ベヴァリッジ報告翻訳出版には、次のような現代的意義があると考えます。

- ① 国民、事業主が、社会保険法や労働法など社会保険労務士が守ろうとする価値を理解し、健全な世論形成に寄与することができる（社労士総研の社会貢献として）。
- ② 社会保険労務士が、細かい制度の根底にある、社会保険の本質を幅広い視野で学ぶことができる。
- ③ 日本の皆保険、皆年金という防貧対策だけでは不十分で、児童手当、医療政策、雇用維持、住宅政策など社会政策の枠組みで考える重要性は現代にも通用する。

以上のように、出版後70年を経て、戦後の社会保障体系の見直しが求められるようになっている今

日の日本でも、貧困をなくすための社会保険の役割を、それと密接に関係する社会保障諸制度、さらには雇用政策などの社会政策との関係で位置づけ、初めて社会保障のあり方を理論的・体系的に示した古典から学ぶべきところは大きいとご理解のうえ、本研究に対しご期待いただきたく思います。